筑紫女学園大学リポジト

L’influence de la Bibliothèque orientale de Barthélemy d’Herbelot de Molainville sur les oeuvres de Nerval

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2023-03-23
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 間瀬, 玲子, MASE, Reiko
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/1149

バルテルミー・デルブロ・ド・モランヴィルの『東洋文庫』がネルヴァルの作品に与えた影響

間　瀬　玲　子

L'influence de la *Bibliothèque orientale* de Barthélemy d'Herbelot de Molainville sur les œuvres de Nerval

Reiko MASE

Ⅰ．序

19世紀フランスの作家ジェラール・ド・ネルヴァル Gérard de Nerval（1808－1855）は、17世紀の東洋学者バルテルミー・デルブロ・ド・モランヴィル　Barthélemy d'Herbelot de Molainville（1625－1695）（以下デルブロと略す）の『東洋文庫』*Bibliothèque orientale* を参考にしたと作品内で明言している。過去にデルブロの『東洋文庫』に関するネルヴァルの記述に関して論じたことがあった。その論文ではネルヴァルが強い関心を寄せていたディオラマを論考の出発点としていた。(1)　本論文ではネルヴァル自身が作品中で言及した箇所、また校訂版の注に記載された箇所に注目したいと考えている。そしてネルヴァルがどの程度まで『東洋文庫』を参考にしたのかを検証したいと考えている。なお日本では長らく『東洋文庫』と翻訳されてきたので、この訳語を使うことにする。

Ⅱ．デルブロの『東洋文庫』

すでに序で述べたようにデルブロは17世紀の東洋学者である。『19世紀ラルース大辞典』*Grand Dictionnaire universel du XIXe siècle*　の《Herbelot (Bartélemy d')》には以下のように書かれている。これは以前発表した論文にも引用をしたので、引用は一部分だけとする。

> Herbelot (Barthélemy d'), orientaliste, né à Paris en 1625, mort en 1695. Après avoir étudié la plupart des idiomes sémitiques, ainsi que le turc et le persan, il voyagea en Italie pour entrer en relation avec les Orientaux qui affluaient dans les ports, acquit des manuscrits et fut nommé plus tard, par Colbert, secrétaire-interprète pour les langues orientales, puis professeur de syriaque au Collège de France.(2)

バルテルミー・デルブロ、1625年にパリで生まれ、1695年に亡くなった。セム語族（ヘブライ語、アラビア語）の大部分及びトルコ語、ペルシア語を学んだ後、港に集中する近東諸国人と交流を持つために、イタリアに旅行し、自筆原稿を入手した、そして後にコルベールによって東洋語の秘書兼通訳に任命され、次に古典シリア語のコレージュ・ド・フランスの教授に任命された。

以前論文で引用した『19世紀ラルース大辞典』以降、とりわけ20世紀に出版された事典類でデルブロの項目を見つけるのは困難であった。また20世紀以降デルブロに関する研究はほとんど発表されていないというのが現状である。研究者を挙げるとするならば、Nicholas Dew 氏である。[(3)]

さて現時点で入手した『東洋文庫』は以下のとおりである。なおフランス語の表記を現代フランス語表記に一部変更している。今後の引用においても、現代フランス語表記に変更して記載をする。

A. Monsieur D'Herbelot, *Bibliothèque orientale, ou Dictionaire universel contenant généralement tout ce qui regarde la connaissance des Peuples de l'Orient*, Paris, Compagnie des Libraires, 1697. フランス国立図書館電子テキストサイト Gallica から入手した。 本論文ではこのテキストを引用する。略号は BO とする。

B. *Bibliothèque orientale ou dictionnaire universel*, tome premier – tome sixième, Paris, chez Moutard, 1781-1783. 原書を入手した。著者名は記載されていない。

C. *Bibliothèque orientale ou dictionnaire universel*, tome premier – tome sixième, Paris, chez Mourtard, 1781-1783.（Elibron Classics 社による復刻版を入手した、巻によって原書と発行年数が違う場合がある。原書と同様に著者名は記載されていない。）

本論文において参照したのは上記の A、B、C の3種類である。A は1巻本、B と C は6巻本という違いがある。具体的に論じる前に一言記載しておきたいことがある。ネルヴァルが1697年版を参考にしたのか、1781-1783年版を参考にしたのかを明確に結論づけるまでには至っていない。それは1巻本と6巻本を比較すると記述にあまり違いがないからである。

ネルヴァルは『東方紀行』（1851）の最後のほうで次のような記述を残している。

C'est dans une des galeries de la montagne de Kaf qu'ont été réunies les images des soixante-dix empereurs ou *solimans* qui régnèrent avant la création de l'homme. Les plus anciens sont difformes et ont des rapports avec les différentes races d'animaux. Il est probables que la théogonie arabe a puisé l'idée de ces êtres fabuleux dans les représentations des dieux indous, assyriens et égyptiens. On peut consulter sur tous ces points la *Bibliothèque orientale* d'Herbelot. [(4)]

人間の創造の前に君臨した70人の皇帝またはソリマンの姿が集められたのはカフ山の地下道のひとつである。最も古いものは醜いし、異なる動物の種と類似点がある。アラブの神々の系譜はインド、アッシリア、エジプトの表象の中から、伝説上の存在の考えを得たのであろう。これらのすべての点に関してデルブロの『東洋文庫』を参考にすることができる。

狭い意味でとらえると、カフという山について参考にしたと解釈もできる。しかし広い意味でとらえると、中近東などの伝承に関して『東洋文庫』を参考にしたとも言える。インド、アッシリア、エジプトの表象への関心を探るために『東洋文庫』は非常に重要な文献であったことがわかる。以前ネルヴァルの『東方紀行』における地下世界を論文として発表したことがある。(5) 上記のネルヴァルの引用文の中の「人間の創造の前」は非常に重要なフレーズである。ネルヴァルがかなりこだわりを持っていた一種の伝承である。そして次に大事な点は「カフ山の地下道」である。galerieには回廊という意味もあるが、地下道という意味もある。ネルヴァルの文学世界を考えるとやはり地下世界と訳すほうがより適切であると考えている。

Ⅲ．ネルヴァルが作品内で言及した単語及び校訂版の注に記載されている例

ここで以前『東洋文庫』を論じた時とアプローチを変えてみたいと考えた。まずネルヴァルが作品内で言及した単語で、かつ『東洋文庫』に項目として記載されている単語に注目した。またネルヴァルの作品の校訂版の注に記載されている単語にも注目した。

1．ネルヴァルが作品内で記載した単語が『東洋文庫』に項目として記載されている例

（1）Caf (Kaf)　カフ

カフに関しては過去に発表した論文でも論じたことがある。その論文で論じた時とは観点を変えて論じてみたいと考えている。

ネルヴァルは『東方紀行』に収録された「カリフ・ハケムの物語」に次のような一節がある。

J'ai vu là plus de merveilles que n'en renferme la montagne de Kaf, où sont cachés les trésors des génies... (6)

私はそこに精霊たちの財宝が隠されているというあのカフの山が秘めている驚異以上の物を見たのです...

ネルヴァルはこの文章ではKafと記載している。この文章の後に「驚異以上の物」の具体例が記載されている。しかしそれらの具体例はネルヴァルの文学作品において重要な位置を占めていると

は言いがたい。例を挙げると「水晶の象」「黄金の木」「孔雀」「樟脳の塊」「テント」である。

それでは『東方文庫』の Caf の項目を精査してみよう。なお引用は一部現代フランス語表記に改変をしている。引用に際しては上記にあげた文献 A を利用する。

CAF, Montagne que les Mohométans ignorans dans la Géographie, tels que font les Alcoranistes, gens attachés aux fables débitées par leur faux Prophète, croient entourer tout le globe de la terre et de l'eau, et borner de tous côtés son hémisphère. (7)

カフ、地理の知識がないマホメット教徒たちは、それは偽予言者がでまかせにしゃべった寓話に引きつけられた人々であるアルコラニストがそうであったように、地球全体が大地と水に取り囲まれ、至る所でその半球の境となっていると思っている「山」。(8)

ネルヴァルは地球の内部に強い関心を抱いていた。それは過去に論文で論じたことがある。(9)　ネルヴァルの関心は地球の形状及び内部である。コーランの教えそのものに無関心とは言えないが、強い関心があったと言えるほどの知識はなかったと考えている。

Sur cette supposition, ils disent que le soleil, à son lever, paraît sur une des croupes de cette montagne, et qu'il va se coucher derrière l'autre qui lui est opposée... (10)

この仮定に基づき、彼ら（マホメット教族）は太陽が日の出でこの山（カフ）の頂のひとつに出現し、そして反対側にある他方の後ろに沈むであろう、と言っている。

この記述により、太陽がカフの頂でのぼり、そして沈むと考えられていたことが理解できる。それぐらい重要な山であったと言えるであろう。

さて次の記述はネルヴァルの文学世界にとって重要なキーワードが出てくる箇所である。

La terre se trouve donc au milieu de cette montagne, comme le doigt au milieu de l'anneau, et sans cet appui elle serait dans un perpétuel tremblement, et ne pourrait pas servir de demeure aux hommes. Cette montagne ou anneau de la terre est de couleur d'émeraude, et toutes les autres montagnes n'en font que des branches... (11)

それで地球はこの山の真ん中にある、それは指が指輪の真ん中にあるようなものである、そしてこの支えなしでは、地球は絶えまない振動の中にいるであろう、そして人類に居住地を提供できないであろう。この山すなわち地球の指輪はエメラルドの色をしている、そして他のすべての山はその枝状の物しか作っていない（後略）。

デルブロの『東洋文庫』を信じるとするならば、カフという山は地球を指輪のように取り囲んでいることになる。そしてカフは人類に居住地までも提供している。カフ以外の山など論じるにも値しない存在ということになる。以前執筆した論文では「指輪」という単語の重要性を強調した。しかし改めて「カフ」の項目を熟読すると、デルブロは「指輪」はあくまで比喩として使っているに過ぎないと考えている。『東洋文庫』を読んだネルヴァルは「指輪」に注目したかもしれないが、それよりも地球を指輪のように取り囲むカフに注目したと考えるほうが自然であると思われる。『東洋文庫』のカフには「アダムの創造以前」《avant la création d'Adam》という表現も出てくる。これは以前別の論文で言及したことに通じる表現である。[12]

（2）Edris　エドリス

ネルヴァルの『東方紀行』に収録された「暁の女王と精霊の王ソロモンの物語」にエドリスが登場する。

> Au centre de la terre... dans l'âme du monde habité ; là s'élève le palais souterrain d'Hénoch, notre père, que l'Égypte apelle Hermès, que l'Arabie honore sous le nom d'Edris. [13]

> 地球の中心で（. . .）人が住んでいる世界の魂の中、そこには私たちの父エノクの地下宮殿が建っている、エノクとは、エジプト人はヘルメスと呼び、アラビア人はエドリスの名で敬っている。

プレイヤッド版の編者がつけた注には以下のように書かれている。なおこの注にはデルブロの『東洋文庫』の記述が引用されている。

> Nerval confond en un seul personnage deux figures bibliques distinctes, Hénoch, fils de Caïn, et le patriarche Hénoch, fils de Jared. [14]

> ネルヴァルは二人の異なる聖書の人物、カインの息子であるエノクとヤレドの息子である家長エノクを一人の登場人物に混ぜ合わせている。

さて『東洋文庫』の「エドリス」の項目を見てみよう。

> Edris et Idris ; C'est le même qui est encore appellé par les Arabes Akhnokh et Khangiouge; c'est-à-dire, Enoch, fils de Jared le Patriarche. [15]

> エドリスまたはイドリス、それはアラブ人によって「アクノーク」と「カンギウジュ」とまだ

呼ばれていて、つまり族長であるヤレドの息子エノクと同じ人である。

なお「　」内の読み方は綴りをなるべく忠実にカタカナ化しただけであり、多少間違っている可能性がある。つまり簡単に言うと、エドリスはエノクと同一人物だと『東洋文庫』には書かれている。それでは「エドリス」に関する記述の引用を続けてみよう。

Dans l'histoire de Joseph et Zuleikha, Joseph invoque Dieu par le mérite d'Enoch en ces termes :

Je vous conjure par la doctrine, par la sagesse, et par le don de prophétie que possédait Edris: car les Musulmans, croient que Dieu envoya à ce Prophète trente volumes dans lesquels tous les secrets des sciences les plus cachées étaient écrits, ce qui a donné un si grand nom aux livres d'Enoch dans l'orient. (16)

ヨセフとズレイカの歴史の中で、ヨセフは次の言葉で、エノクの能力によって次の言葉で神に加護を求める：

私はエドリスが所有していた教義によって、賢明さによって、予言のたまものによってあなたに懇願します。というのはイスラム教徒は神はこの予言者に30巻を送った、その中に最も秘密にされた科学の秘密が書かれている、これらは近東諸国でエノク書にこのような偉大な名前を与えた。

ここで重要なことは、『東洋文庫』の「エドリス」の項目の中に「エノク書」という単語が記載されたことである。『エノク書』に関しては過去に論文で論じたことがある。(17)

そして「エドリス」に関する最後の引用は以下の通りである。

Ces Livres d'Enoch ont toujours été vantés par les Orientaux... (18)

これらの『エノク書』はオリエント人によって常に自慢された。

以上のように、『東洋文庫』の「エドリス」の項目にはネルヴァル研究にとって重要な記述がかなり書かれている。エドリスに関してもっと深く探求すべき点があるのかもしれない。

（3）Jared　ヤレド

『東方紀行』の「暁の女王と精霊の王ソロモン」に次のような一節がある。かなり長いが引用してみよう。

Avide d'honneurs, de puissance et de voluptés, Soliman épousa cinq cents femmes, et contraignit enfin les génies réconciliés à servir ses desseins contre les nations voisines, par la vertu du célèbre anneau, jadis cislé par Irad, père du Kaïnite Maviaël, et tour à tour possédé par Hénoch, qui s'en servit pour commander aux pierres, puis par Jared le patriarche, et par Nemrod, qui l'avait légué à Saba, père des Hémiarites. (19)

栄誉、権力、快楽を渇望し、ソリマンは500人の女性と結婚した、そして有名な指輪の力により、折り合いをつけた精霊たちに近隣の国々に対して彼の意図を役立つように強いた、その指輪は昔カイン族のマヴィアエルの父、イラドによって彫られ、そして交互にエノクによって所有された、エノクは石に命令するためにそれを使った、次に族長ヤレドによって、そしてネムロッドによってそしてエミアリット族の父、シバに遺贈した。

以上のようにこの有名な指輪は、次から次へと所有者が変わったことがよく理解できる、そして上記の引用にも、ネルヴァルの文学世界では重要人物とされるエノクが登場する。それではデルブロの『東洋文庫』ではヤレドはどのように記述されているのかを確認してみよう。ヤレドに関する記述はかなり短い。

Jared le Patriarche, fils de Malaleel, et père de Henoch. (20)

族長ヤレドは、マラリールの息子であり、エノクの父である。

この記述により、ヤレドとエノクが親子関係であることが理解できる。この他の記述には特筆すべきことはない。

以上のようにネルヴァルが作品内で言及した人物が、デルブロの『東洋文庫』でどのように記載されているかを精査した。すべての人物を精査したとは断言はできない。しかしここで言えることは、ネルヴァルは『東洋文庫』からかなり影響を受けているということである。人物名、指輪、地下世界などネルヴァルの文学世界の奥深い箇所と直結する単語を『東洋文庫』から見つけることができた。

2．校訂版に明記されている単語が『東洋文庫』に記載されている場合

ネルヴァルの文学作品には複数の校訂版がある。今さら書くほどのことではないが、単数または複数の編者が本文を確定し、注をつけている。この注にデルブロの『東洋文庫』が記載されている場合がある。この記載のすべてを論じるわけではなく、重要な項目について言及する所存である。

（1）Iaman　イエメン

ネルヴァルには「アグアド夫人へ」*à Mad Aguado* という詩がある。その一節を引用する。

Lanassa ! fais flotter tes voiles sur les eaux !
Livres les fleurs de pourpre au courant des ruisseaux.
Les Neige du Cathay tombe sur l'Atlantique. [21]

ラナッサよ！　あなたのベールを水の上で浮かべなさい！
緋色の花々を小川の流れに委ねなさい。
中国の雪は大西洋に降る。[22]

この詩編に書かれているラナッサに注目してみよう。デルブロの『東方文庫』の「イエメン」の項目にラハッサが登場する。

Selon ce dernier sentiment les villes de Cathif, de Baharain, de Ahassa, appelée vulgairement Lahassa, et de Mascath, appartiendraient à l'Iémen. [23]

この最後の意見によると、カチフ、バハラン、アハッサ、俗にラハッサと呼ばれている、マスカトの町は、イエメンに所属していた。

『東洋文庫』ではラハッサと書かれているが、ネルヴァルはラナッサと書いている。同じ都市名と考えてもよいと思われる。日本では「ラサ」と表記されている。ラサはチベットの古都である。ネルヴァルはチベットに旅行したことはない。ネルヴァルにとってチベットは想像上の都市である。『東洋文庫』の「イエメン」にはネルヴァルと深く関わる単語が記載されている。例をあげると「ソロモンの妻、女王バルキス」Reine Balkis femme de Salomon である。

Il était fils de D'houlmenar Abrahah, duquel descendait aussi Hadhad Père de la Reine Balkis femme de Salomon, que les Arabes croient être celle que l'Ecriture sainte appelle la Reine de Saba. [24]

彼（アフリキス）はドゥルメナール・アブラハの息子である、ハドハドの血筋である、ハドハドはソロモンの妻、バルキス女王の父である、バルキスは聖書がシバの女王と呼んでいる。

シバの女王はネルヴァルの『東方紀行』に挿入された「暁の女王と精霊の王ソロモンの物語」の主要人物である。ネルヴァルの想像力において、デルブロの影響によりイエメンとチベットに関連性

があると言えるかもしれない。そこにネルヴァルにとって重要な人物、シバの女王が深く関与していると言えると考えている。

（2）Caherah　カエラ

ネルヴァルの『東方紀行』に挿入されている「カリム・ハケムの物語」の中に次のような一節がある。

Saturne, la planète de Hakem, était pâle et plombé, et Mars, qui a donné son nom à la ville de Caire, flamboyait de cet éclat sanglant qui annonce geurre et danger. [25]

ハケムの星、土星は青白くそして鉛色であった、そしてカイロの町にその名前を与えた火星は戦争と危機を告げる血まみれの輝きで燃え上がるように輝いていた。

ネルヴァルのプレイヤッド版の編者は上記の引用文の Caire（カイロ）に注をつけている。その注によるとジルベール・ルージュ Gilebert Rouger の校訂版の注を見るようにと書かれている。ルージェの注に記載されている『東洋文庫』の Caherah カエラの項目が、プレイヤッド版の注に引用されている。[26]　そこでルージュの校訂版を見ると、『東方紀行』の Cahera の項目の記載が引用されていた。[27]　それでは『東洋文庫』のカエラの項目を見てみよう。

Caherah, et Al Caherah, Ville capitale de l'Egypte, que nous appelons le Caire, et le grand Caire. L'origine de son nom vient de ce que Giavhar, Général de l'armée de Moêz Ledinillah, premier Khalife de la race de Fathimites qui avait subjugué par la force de ses armes toute l'Egypte, voulut que l'on jetât les fondemens de la nouvelle ville qu'il entreprit d'y bâtir sous l'horoscope ou ascendant de Mars, à qui les Astronomes Arabes donnent l'épithète de Caher, qui signifie vainqueur et conquérant, de sorte que cette ville fut nommée Al Caherah, comme qui dirait la Victorieuse. [28]

カエラとアル・カエラ、私たちがカイロまたは偉大なカイロと読んでいる町。その町の名前の起源はギアヴァール（モエズ・ルディラの軍隊の将軍、その軍隊の力によって全エジプトを征服したファティミッド族の最初のカリフ）は、人々が火星の星占いまたは影響力で、そこに建設することを企てた新しい町の基礎を人々が築くことを望んだ、それにアラブの天文学者たちは、カエールという呼び方を与えた、それは勝者または征服者を意味する、それでこの町は、アル・カエラと名付けられた、それは勝利者と言っているようにである。

上記のように、ネルヴァルの「カリフ・ハケムの物語」の一節、つまりカイロの町と火星の関係は

『東洋文庫』の「カエラ」の影響によるものと考えてもよいと考えられる。なおルージェの校訂版の注に記載されている『東洋文庫』のカエラは、初版から引用されている。

Ⅳ．結論

上記のようにネルヴァルがデルブロの『東洋文庫』に影響を受けたかどうかを検証した。まずネルヴァルが作品内で記載した単語が『東洋文庫』に記載されている例を検証した。次にネルヴァルのプレイヤッド版の注に『東洋文庫』の項目が記載されている例も検証した。校訂版に記載されている例は他にもかなりあることは事実である。しかし分析するには及ばない例が多かった。

今回の分析により、明らかにネルヴァルがデルブロの『東洋文庫』の影響を受けている。しかし最後まで結論がでないのは、ネルヴァルが参考にしたのが初版なのか、または再版なのかである。これは今後の課題とする。また今回の論考で論じるにはまだ資料不足の項目も存在する。それも今後の課題としたいと考えている。

注

(1) 間瀬玲子「バルテルミー・デルブロの『東洋文庫』」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部国際文化研究所　論叢』第16号、2005年8月、pp.116-124.

(2) Pierre Larousse, *Grand Dictionnaire universel du XIXe siècle*, tome 12, Nîmes, 1990, pp.206-207（復刻版）.

(3) Nicolas Dew, «The Order of Oriental Knowledge : The Making of D'Herbelot's *Bibliothèque Orientale*», *Debating World Literature*, London,Verso, pp.233-252. Nicolas Dew, *Orientalism in Louis XIV's France*, Oxford, Oxord University Press, 2009, pp.41-80 et pp.168-204.

(4) Gérard de Nerval, *Œuvres complètes*, tome Ⅱ, Paris, Gallimard, coll.«Bibliothèque de la Pléiade» 1984, p.838. 以下この巻をPL.Ⅱと略す。日本語訳をする際に、『ネルヴァル全集　Ⅲ　東方の幻』筑摩書房、1998年に収録された野崎歓・橋本綱　訳『東方紀行』を参考にした。

(5) 間瀬玲子「ネルヴァルの『東方紀行』における地下世界」『筑紫女学園大学研究紀要』第16号、2021年、1月、pp.15-23.

(6) PL.II, p.560.

(7) BO, p.230. 本文に元の本の説明は記載している。

(8) コーランはフランス語ではアルコーランと訳されていた。よってアルコラニストは、コーラン主義者ということになる。しかしネルヴァルはコーランそのものに強い関心を持っていたわけではないと考えている。

(9) 間瀬玲子「ネルヴァルと『ニコラス・クリミウスの地下世界への旅』」『筑紫女学園大学研究紀要』第15号、2020年1月、pp.17-26.

(10) BO, p.230.

(11) BO, p.231.

(12) 注5で記載した論文においてイザアク・ド・ラ・ペイレール『アダム以前に創造された人間』について簡単に紹介した。

(13) PL.II, p.718.

⑭ PL.II, p.1604.

⑮ BO, p.310.

⑯ BO, p,310.

⑰ 間瀬玲子「『エノク書』がネルヴァルに与えた影響」』筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』第4号、2009年1月、pp.83-94.

⑱ BO, p.310.

⑲ PL.II, p.769.

⑳ BO, p,478.

㉑ Gérard de Nerval, *Œuvres complètes*, tome I, Paris, Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1989, p.732. 以下ネルヴァルのこの巻を PL. I と略す。日本語訳をする際に、『ネルヴァル全集　II 歴史への旅』筑摩書房、1997年に収録された「詩（1841-46）」田村毅　訳を参考にした。

㉒ PL.I, p,1770 に Cathay は中国の古名であると記載されている。

㉓ BO, p.477.

㉔ BO, p.477.

㉕ PL.II, p.543.

㉖ PL.II, p.1536.

㉗ Gérard de Nerval, *Voyage en Orient*, tome IV, Paris Imprimerie nationale de France, 1950, pp.273-274.

㉘ BO, p.233.

（ませ　れいこ：英語学科　教授）